

---

# 疫病神の君

古時灯葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

疫病神の君

### 【Nコード】

N8600E

### 【作者名】

古時灯葉

### 【あらすじ】

上京して、大学生活を送ることとなった女の子。まだ、住み始めて数日、彼女の家には自称疫病神のストラップみたいな小鬼がやってくる。だけど、彼女は……。

## 第一話

上京してまだ数日。香田幸葉の朝は見知らぬ曲とともに訪れたのだった。

「ふ？ ふええ！」

爆撃音のようなトランペットを奏でる元凶に彼女は枕を頭にかぶせた。地震でも起こったかのように手でしっかり押さえ込むと、頭上から何かが滑り落ちてきた。耳元で怖がるかのように震え、騒ぐようなそれは携帯電話だ。

地震かと思いました。寝ぼけまなこで、呂律が回らない口調でつぶやく彼女。携帯を開くと、時計のイラストが現れる。

「……目覚まし？」

ボタンを指で押すと、勇ましいそれは幸葉を現実へと置き去りにして、夢の中へと戻っていった。

はて、向こうの世界にもう片目を突っ込みかけている彼女は首を傾げた。こんな曲を目覚ましにしたっけ？ いや、してない。いつも初期設定、着信音1でマナーモード。音楽に疎かったし、自分の趣味を見せびらかそうなんて思ったこともなかった。ぶるぶるだけで、普通は十分に気がつくものだ。

まあいつか、無事に起きられたから。寝坊して遅れるよりはずっとましだ。そう考えて、彼女は気に止めもしなかった。時計を一目見るとまだ、午前4時だし。

午前四時……？

あれえ？ 午前六時に決めたはずだったのに。

間違えたみたいです。独り言の後、まばたきをした。不思議なこともあるものだなあ、そう能天気には浮かべていたりもししていたりする。

一人暮らしに未だ慣れないなと実感しながら起き上がり、着替えようとして。

ドン！ ドン！ ドン！ ドン！ ドン！ ドン！ ドン！ ドン！ ドン！ ドン！

玄関から、豪雨のようなノック音が降ってきた。

「はいはい、誰ですかあ？」

時刻は午前四時を回ったところ。こんな時間に訪れる人はめったにはいない。誰だつて怪訝、というか布団の中に潜り込んでぶるぶる隠れるはずの場面である。

しかし。

彼女は怖がらない。むしろ寝ぼけた姿を隠さずに笑みを浮かべ、来客を迎えようと、玄関を開いた。来客はどんな時でも笑顔で迎える。それが、山のふもとにある、彼女の故郷のならわしだった。

朝日がまだ昇らない。ひたりと冷え冷えとした足音が聞こえそうな廊下には誰もいない。

階段、いやはや、怪談である。しかも、まだ音はなり続けている。ちようど、彼女のひざ頭のあたりで。

はて？ 幸葉は、ここでもうやく異変に焦点を合わせた。新聞受けがかんしゃくをおこしてる。そう見えた。

誰かが好意で、目覚まし時計を入れてくれたのかもしれない。そう、彼女は考える事にした。そもそも、いたずらである可能性を考えない。

何にも疑わず、新聞受けを開いた。

「あら」

手持ち無沙汰の右手を口元に当てた。固まったまま、数秒。それを見つめていた。

子鬼のストラップだ。とはいっても、手の平くらいの大きさだった。まるで、外にだしてくれ、と壁を叩かんばかりに彼女に背を向ける。

音はすでに止んでいた。子鬼の背中にくぎ付けになる幸葉の視点は動かない。

「何か言えよ、他にさあ！」

突如、ストラップがぐるりと回った。幸葉と向き合ったその体は筋肉というよりは、お餅みたいにまるっこい。そして、蒼色の肌がそのストラップ感を際立たせた。

鬼といえば、腰を抜かすほどに怖いもの。それに普通なら、人形は喋らない。そう思っていたのに。

「か、可愛い」

幸葉は、思わずストラップを右手で握りしめた。

「へっ？　ちょっ待って。な、何するんだよ。く、くるじい」

幸葉にとってはそうであっても、ストラップにとっては、文字通りに締められていた。

## 第二話

「で、俺の言ってる事、その頭で理解したわけ？」

折りたたみ式のテーブルにのせた醤油小皿。その上にティッシュを4枚折りして座布団替わりにしてストラップは、腕を組みあぐらをかいて座っていた。突然の来客であるくせに、妙に態度が大きい。「あなたは、ストラップ、じゃなくて疫病神さんだつてこと？」

幸葉は、食器を持ってきてよかったと安堵した。彼の態度に腹を立てようとはしない。ただ、突然の来客にも対応できた事にほっとしていた。

そうだ。俺は疫病神なんだ。そう、ストラ……いや、疫病神は、ぶにぶにとした蒼色の胸を張った。

そんな、ス……いやいや、疫病神を幸葉は物珍しそうに眺めていた。

「子鬼みたい」

蒼色の肌と喧嘩するような、虎柄ストライプのパンツに、ひし形を鼻筋で割ったような三角の目。生意気に斜めに吊り上げた口にちりちりと焼けたような、レゲエを踊りそうな茶髪。極めつけに、二本の頭から生えたつの。360度どこからどう見ても、10人中8人がそうと答えるだろう。もしくは、近所の悪ガキのようだ。

だまし絵のもう一つの絵柄を探すように、幸葉は疫病神に向かって目を凝らす。知らず知らずのうちにじりじりと、彼に顔を近づけていった。

悠然とあぐらをかいていた彼は、彼女が近づくにつれて組んでいた両腕を床につけ、胸を後ろにそらしていく。顔が寒色から暖色に染まっていく。幸葉と疫病神の距離が近づき、鼻と鼻がくつつきそうになる。そんなところで。

「な、なにじろじろ見てるんだよ」

「だって、珍しいですもん。疫病神さんなんて、初めて見ましたし」

「お前、妖怪を見たことあんの？」

おっかなびつくりといった調子で疫病神は問う。もし、こんな小娘が霊能力者だったら、対応を変えなければならぬかもしれないかもしれない。異形の者と仲良くしようとする奴らがいる一方で、まるで害虫の如く一掃しようとする奴もいるからだ。じつくりと観察するに越したことはない。

「いえ、全く見たことはありません」

疫病神は張っていた背中を丸めた。普通は誰も見ないはずだ。だからといって、さして珍しがる存在でもない。

むしろ……

「俺の事、怖くないのか？」

「へっ？　なんでです？」

幸葉は首を傾げた。

「いや、えつとな。俺、疫病神だよな。普通は、不幸を呼ぶ存在としてここにやってくるわけだな。だから、俺を見た瞬間に凄い怖がらなきゃいけないような、そんな感じがするんだけど」

全然驚かない彼女の間に、いささかペースを乱される疫病神。両目が面白いくらいにせわしなく動く。こんな奴なんて、あまり会うことはない。

「うわあゝ。びつくりです」

「って、そんな見え見えな反応するなよ！」

「びつくりしなきゃいけないって言ったから、びつくりしただけですよ」

「それを初対面でやってよ。可愛いなんて、初めて言われたよ」

「だって、可愛いじゃないですか。上京して初めてのお友達がこんな可愛いなんて、私ついてます」

「俺は、疫病神だぜ？　何度も言うけどな、お前を不幸にするために来たんだぞ？」

「でも私、不幸になんてなってませんよ？　むしろ、あなたに会えて嬉しいです」

嬉々とする幸葉に、疫病神は彼女に見せないようにため息をついた。

俺、不幸を運ぶ存在なのに……。



### 第三話

しかし、幸葉の身の上話を聞くと、そのたびに疫病神は彼女の不幸の大きさに恐れおののいた。脱出マジックが失敗し、剣が突き刺さっていく手品師のような気分を厄病神は味わった。

第一志望の大学には落ち、下宿先の入居する抽選にも落ち、揚げ句のはてには高校時代に付き合っていた彼氏にも逃げられた。他にも、いろいろと米粒を拾うような細かい不幸も多々聞かされた。

でも、むしろそれを、まるで良き青春時代のように懐かしく、甘酸っぱさも残しながら、その思い出に暗い影を落とす事なくあっけらかんに語る幸葉に、厄病神は戦慄を抱いた。

「お前、俺がどうこうするよりも、もう十分にどつぽにはまってるじゃねえか！」

「どつぽになんかはまってませんよ」幸葉は、どうして疫病神が怒るのかわからないままに首をひねる。「第一志望の大学に行きたかった人は、無事に受かってよかったし。下宿先だって、無事に当選した人がいてよかったじゃないですか。たーくんだって、新しい彼女と楽しくやってますよ。きっと」

「お前は、幸せなのかよ？」

お前、うさん臭い。そう言外に臭わせる疫病神の問いに、幸葉は力強くうなずいた。

「もちろんです！ 人が嬉しそうにしていると、私も嬉しくなります！」

「家族が悲しむんじゃないの」

「家族は……」そこで初めて、幸葉の顔に影がさした。「私が小さい頃に両親が別居しました」

疫病神は手で目を覆い、天を仰いだ。こいつ、とことんついてない。思わず同情してしまいそうになってしまうほど。

「でも、うまい具合に二人の間を行き来しましたよ。機嫌を損ねる

前に、私はもう一方の家を訪ねてましたから」

口を挟みたい。けど、厄病神はどうにかして我慢する。そして、自身に言い聞かせる。いいか？ 俺は疫病神なんだ。そっだ、不幸を運ぶ存在なんだ、と。

「お前……」

「ごめんなさい。一つだけいいですか？」

「何？」

「お前、じゃなくて、名前で呼んでください。私は、香田幸葉っていいです。ユキハって呼んでください。あなたは？」

「疫病神でいいよ」

「疫病神だつてたくさんいるでしょう？」

「そりゃあ……いるけど」

厄病神は、何故か口ごもった。

「疫病神じゃ、言いにくいですよ……。ヤク、そう呼んでいいですか？」

「別になんでも」

疫病神、改めヤクは口先を尖らせてそっぽを向いた。

「やった。よろしくお願いしますヤク」

「こちらこそ、ユキハ」

けど、ヤクは内心思う。名前からして、不幸じゃねえか。苗字はキョウダで名前も、よく見たら運がない。この先、自分がうまくやっていけるのか全く、わからなかった。

そんな時に、ぐうと誰かの腹が鳴るとはいつても、二人しかいないからどちらしかないない。

「お腹空きましたか？」

そう尋ねたのは幸葉だった。ということは。

「今、俺が腹鳴らしたって言いたいの？ 幸葉は」

子供のようにヤクは頬を膨らまし、すねた。

「いいえ。私、お腹ぺこぺこだったので。朝ごはんにしようかなって。そろそろ炊けますよ」

「俺、おにぎりな！ 海苔つきで中に梅干しが入ってるの！」

「ちようどいいです。昨日、海苔と梅干し買ってきたばかりなんですよ」

ヤクは、目を白黒させた。こんなに、自分の好みを揃えられるなんて珍しい。いやいや、ヤクは幸葉に気付かれないように首を横に振る。なんで、疫病神の俺がついてなきやいけないんだ。ちきしょう。

.....

彼らの朝ごはんが終わって、幸葉は出かける準備を始めた。とは言っても、昨日のうちに済ませていた。持ち物の確認するだけだ。

「とにかく、今日は初めての登校日なんですよ。大学の」

「そんなに喜ぶもんなのか？ それって？」

「喜びますよー。長く、苦しい受験勉強が終わり、春がやってくるのです！ で、頭痛くないですか？」

「なんのこれしき。つのなんて、疫病神で有る限り、とれちまったらすぐに生えるんだよ」

「そうならよかったです」

「でも、あまり揺らすなよ。ちよつぴり、痛い」

疫病神は、つのに絡まる紐を目を細めながら見上げた。紐は、幸葉の鞆に結ばれていた。彼女と一緒に連れて行きたいとせがんだのだった。

「なるだけ、揺らさないように注意します」幸葉はそつと鞆を持ち上げる。「痛くないですか？」

「へん、こんなもん」

ヤクの体が震えているように見えた。

「痛いすよね？」

「..... 本当は痛いけど、我慢する」

## 第四話

ユキハが言うのには、アパートから駅まで歩いて10分弱。大学最寄の駅まで、電車で20分強らしい。だいたい、一時間以内に大学に到着するはずで、ヤクもまたそれくらいの辛抱だと腹をくくっていた。

それなのに。

駅に着いた途端、風が厄病神をあおる。ホームの前を何食わぬ顔で過ぎ去る電車に遭遇した。それも、3台。ここは、各駅停車しか止まらない駅だった。それが、数分も続く。予想以上に、つのが締められる不快な状態を我慢するはめになったヤクだった。でも、それ以上に不快を体験することとなるのである。

乗った電車には、息ができないほどに人が詰め込まれていた。

ヤクが結ばれている鞆は、急停車になると必ず、前後左右から押し潰される。人間だって、そうなのだから鞆なんて尚更だ。あまり中身が入っていないそれは、ペチャンコにひしゃげてしまっていた。車内の中、ぎゅう詰め状態の人の間から地獄の釜から立ち上るように沸き起こる熱気にも辟易していた。

幸葉だって、棒のように立っているのが嫌で、腰から下をのけ反るように動かしているのに。

ただ、動きが急過ぎる。

ヤクが首を上げて、幸葉を眺めると、彼女は口を真一文字に結んで、暑いのに顔がヤクの肌と同じく青ざめていた。鞆をかけている腕の肘を折り曲げ、手の平が鞆の表面をさ迷う。ヤクの足に爪が触れると、手がヤクを包んだ。冷や汗に湿った手の平が、ぶるぶると震えていた。

「ユキハ？」

満員電車の中で感づかれないように、そつと声をかける。彼女は気がついた。ずっと、ヤクに視線を送っていたから。彼にようやく

気がつかれた幸葉は、目線を背後に向けようと、首を後ろに向けようとしていたが、出来なかった。

ヤクは、彼女の示す通りに後ろを向こうとした。でも、鞆が邪魔で向けない。何度も足で鞆を蹴って、鞆の向きがやつと逆になった。森のように鬱蒼と生い茂る人間の胴体から、幸葉の背後に起こっている異変を知るのに時間がかかったが、知ってしまうと彼女がづく運のない奴だ、と同情するしかなかった。疫病神なのに。まだ、力すら発揮していないのに。

見知らぬ手が幸葉の穿いているジーンズの尻を触り続けていた。骨董品を鑑定するように、慎重にかつ大胆に触っている。触り方を変えると幸葉の背がぴんと伸びた。彼女が嫌がっているのはヤクでもはつきりとわかった。

登校初日から痴漢かよ……。ヤクは、再度呆れた。この前、担当した女もやられていた。それも、好意を抱いていた男性から。事実が発覚した後、彼女の反応は思い出たくない。男性が社会的に抹殺されたのは覚えていたが。

まったく、ついてない。

ヤクは、幸葉などいざ知らず、自身に同情した。そして、能力を使う。そもそも、使う前に不幸に巻き込まれた彼女にいらつとしたが。そんな彼のことなんて、乗客の誰もが気がつかない。

突然、電車が急ブレーキをかけた。乗客全員が、進行方向の逆側にバランスを崩した。もちろん、幸葉も痴漢も例外ではなかった。

ただ、結末が違った。

結論から言うと、幸葉は踏み止まった。扉側に近い位置でに立っていた彼女は、雪崩のように崩れた人ごみの主流から離れていたのだった。

一方の、痴漢犯は倒れ込む人ごみの中に飲まれていった。

その隙に、幸葉は彼の手から逃れようと、体全体をねじって、扉のすぐそばにまで体をよせ、ポールにつかまった。

その後、幸葉を付け狙っていた痴漢犯の魔の手から逃れられた彼

女は、無事に大学近くの駅で降りることができた。

まだ、ガイダンスが始まるまで時間がある。彼女は、改札へ向かう人の群から離れ、一人、壁際に身を寄せた。

「ヤク」

誰も気にはしていないはずだとは思っていても、自然とひそひそ声になる。

「なんだよ」

眠そうな声で、ヤクは答える。実際に疲れていた。人間はつくづく奇妙だ、と感心してしまう。どうして、疲れるのにやめないのだろう？ と。

「あれ、ヤクがやったんですか？」

「否定したら、どうなるんだよ」

「質問に答えてください」

そう言う幸葉の声は、ヤクが聞いた事すらない程に、硬かった。

「……俺がやったよ。急ブレーキを踏ませるような状況を作った」  
右下を向き、タイルの隙間に目を移す。ユキハから目をそらしながら、ヤクは答えた。

「どうして、そんな事するんですか？」

「お前が、苦しそうに見えたから」

「私は大丈夫でした。他の女の子みたいに、お尻も胸も出てないけど、触ってくれる人がいて、嬉しかったです」

「お前……」

そう言いかけたヤクの体を幸葉の右手が握りしめた。

「早く行きましょう。時間がもうないですから」

実際、大学へ行き、席に座ってガイダンスが始まるまで待つ時間はあるのに、幸葉は早足で歩き始める。

彼女の手が不自然な程に汗ばみ、震えていたのをヤクは知っていた。

## 第五話

ユキハは、不幸まっしぐらに進む人間だと、ヤクはそう認識していた。実際、大学生活が始まってから、彼女は自分が不幸になるようなことばかりになぜか、首を突っ込んでいた。

例えば、名前や住所を書かされるような勧誘にほいほいとひっかかったり、上級生（ヤクから見れば、身体のでかいがきんちよ。な）で、数歳しか変わらないのに偉そうな態度に出るのだろうと彼は疑問に思う）の調子のいい文句に、乗っかけて得体のしれない集まりにひっかかったりしかけた事も何度かあった。

そのたびごとに、ヤクが彼女を地獄に引き落とそうとする悪魔（人間なのに、そう見えた）に対して、力を使った。相手が不幸になるような、そんな力を。幸葉には気付かれないように。初日のように怒られたくはなかった。

その甲斐あって、幸葉は知らず知らずのうちに、順調な学生生活を送り始めることができた。

でも、それはヤクだけのおかげではない。彼女は、数多くの不幸を背負うばかりではなく、釣り合いはとれないけど、それで普通程度の幸福もその身に受ける事ができた。

身の丈にあった友達もでき、サークルにも入り、バイトも始めた。その全部が全部そのままうまくいく、なんてことはない。それでも、ユキハが楽しめるくらいのものであった。

けれど、どうしようもない事もたくさんあった。厄病神がどうする事も出来ない出来事だった。

それなのに、誰だって辛くて泣いても仕方がないという場面でも、ユキハが泣き言を漏らした所を、ヤクは見たことがなかった。彼女はいつも、仕方がないわとでもいうように自然にふるまっていた。少なくとも、彼にはそう見えた。

## 第六話

「こんなに、楽しく過ごせるのはヤクのおかげです」

「よく言うよ……」

授業が一巡も二巡もして、幸葉が独り暮らしや大学にも慣れた時期。早めに授業が終わり、何も予定が入っていない幸葉は家でまったりとしていた。

ヤクと、こそこそしないでお喋りができる唯一の時間。

「言つとくけど。俺は疫病神なんだからな」

「でも、私不幸になんてなってませんよ？」

そう言いながら、幸葉はお釜からご飯を取り出し、お皿に盛りつける。片手ですくい、もう片方で梅干しを埋め込む。おにぎりを作ると、ストラップ用のひもから解放されたヤクの目の前に出来たてを置いた。

ほくほく湯気をたてるそれに、ヤクは身体全体を使ってかぶりつき、頬張った。

「うまい、と唸った後に。」

「お前が、やたらに不幸に首突っ込み過ぎなんだ。別の意味で大繁盛だ」

「ご飯粒をほつぺたにつけながら、ヤクは彼女を三白眼にして見る。『そうですか？ 自覚はないですよ』彼女は、そんな彼の視線を軽くあしらう。『ヤク、本当は福の神なんじゃないですか？』『絶対違う！』」

間髪入れずに否定したヤクの後に乾いた空気が流れ込んだ。あまりの迫力に幸葉の頭の中身が真っ白となった。

「……俺は、疫病神だ」

うなだれ、細くなった声。疫病神は残りのおにぎりに口をつけ、食べ終えた。

「どっちでも、ヤクはヤクですよ。もう一個おにぎりどうですか？」



怒鳴られた後でも、幸葉は平然としていた。いつもそうだ。肩を落としそうな時でも、飄々と彼女は振舞うのだ。

「いいや」

「そうですか？」

いつもなら、もう一個食べるはずなのにと幸葉は首をひねる。

「怒ったわけじゃないからな。ただ……調子が悪いんだ」

「風邪ひいたんじゃないですか？ パンツ一枚だけですし。後で、洋服作りますね。布団しますか？」

「ああ、そうしてくれ」

……………

ヤクの調子はその日から、いやずつと前から悪かったのだが、目に見えて悪くなった。幸葉が彼のために洋服を作って着せても、一向に良くなる気配はなく、食べられるおにぎりの大きさも、段々と小さくなっていった。

幸葉は、彼をストラップにして大学に持ち込まなくなった。

ヤクは嫌がった。ユキハが心配だと。

だが、弱っていく彼を外に連れ出すなんて、彼女には出来なかった。彼も、彼女に普段以上に注意することを約束させて、やっと布団で休むのに同意した。

幸葉もまた、授業が終わると、いやノートをとるだけで出欠をとらない授業は友達にまかせ、サークルにも参加しないで、一直線に家に戻ってヤクの看病に付きつきりになった。

「これで、俺の役目が果たせたよな」

「……本当ですよ」

ヤクの冗談に、言葉少なに反応する幸葉だった。

「早く良くなって下さいね。淋しい時に、鞆見てもなにもないと、もっと淋しくなりますから」

厄病神は、自身の体調が良くなる方法を知っていた。だけど、そ

のためにユキハに迷惑をかけたくなかった。こんなに、親身になつてくれる奴なのに。

「お前、まだ俺と一緒にいようとするの？　こんなに、迷惑かけてんのに」

「迷惑かけるのなんて、当たり前です。私も、ヤクに迷惑かけっぱなしですから」

まるで、ドラマのように淀みなく流れるセリフは、考えた物ではない。幸葉は、ずっとそう思ってた。彼がいなかったら。そんなもの、想像するだけでぞっとした。

「おめでたい奴」

ヤクは、そう吐き捨てたつきり一点に視線を合わせるかのように動かなくなった。おでこに置いてある凍ったティッシュが段々とまぶたへとにずり下がる。

幸葉がそれを直そうとしたときに。

「俺の家族の話してもいい？」

うわごとのように吐き出されたそれは、いつものような響きを持たなかった。珍しい。まるで、恥ずかしがり屋の子供のようだった。

「何でも聞きますよ」

「俺の事、嫌いにならない？」

「どうして、嫌いになんかなりますか？」

「俺の家族、父親と母親、それに兄貴の四人家族なんだ」

「それで？」

「俺以外、皆福の神」

唐突な出来事に、血の気が引いたように幸葉には感じられた。

「そもそも、疫病神や福の神は生れつきじゃない。どれだけ、人間を幸せにするかで決まるんだ。家族全員、人間達を幸せにしてたよ。人の喜ぶ顔はいいもんだって言い聞かされながら育った。いつか、俺もそうなりたいって夢持ってた。でも……実際、仕事に就いてみたらそんなに簡単じゃなかったんだ。どんなに、その人を幸せにし

ようつて意気込んだって、そいつを不幸にしかできなかったんだ。段々と、疫病神になってくのは、俺でも分かったよ。家族は、気にすることなんか無いって励ましてくれたけど、その期待も裏切り続けたんだ。家族に見せる顔もないから、しばらく会ってもない」

「ヤク……」

「もう自暴自棄だったんだ。ユキハに会うのも、お前を不幸にするはずだったのに。お前、笑ってばかりだもんな。揚げ句のはてに、俺を友達だなんていつてさ。正直、うらやましい。お前が楽しそうにしてるの見て、俺も楽しかったのに。やっと、誰かの役に立てたと思ったのに、身体がもう、疫病神になってるみたいだ。お前の家に来て、携帯に悪戯した時はそうでもなかったのに」

「言いたい事は、それで全てなんですか？」

「俺の事、追い出したくなっただろ？ 何たって、俺は落ちこぼれなんだからな」

「全然」ユキハは、小指程度の大きさでしかないヤクの腕を優しく握った。「私は、ヤクが疫病神なんて思ってたませんから。ヤクは私にとって、今もずっと福の神ですよ」

「とことん、お人よしだよ、お前……」

それだけ言うと、ヤクのおでこからまたティッシュが滑り落ちる。今度は、ユキハは直さない。凍ったティッシュが慟哭とともに、溶け出していた。

## 第七話

梅雨の季節に入っても、ヤクの体調は良くならない。むしろ、悪化していた。

布団に潜り込んだまま、動かないのもしばしば。幸葉が、死んでいるのでは？ と、手を震わせながら人差し指でつついてやっと温もりがわかるくらいだ。

目に隈ができ、起きている時間も短くなっていく。起きていても、幸葉が話し掛けた内容にうわごとでしか返せない状態が長く続いた。そんな、ある日のこと。

「ヤク」

「……なんだよ」

「起きてたんですか？」

「どっちだか、わかんね」

「そうですか……」

幸葉は、崩した足を正座に揃えた。

「話があります」

きつぱりと言った彼女の口に、ヤクはたわごとで返事した。

「私は、ヤクがどうして苦しんでいるのか、私なりに結論を出してみました」膝に握り拳を両手置きながら。「私が不幸になってないからです」

真っ直ぐに厄病神を見つめた幸葉に、彼からの反応はすぐにはこなかった。

「……なに、言って………んだ？」

「ヤクは、私を不幸にしていないから、苦しんでいるですよ」

「俺は……お前に、幸せでいて……ほしいんだ。……お前みたい」に、俺の事……友達なんて………言った奴な………んて一人も………いないんだ………からな」

「友達だからです」儚げに頬を緩める彼女の顔をヤクは見れない。

「友達が不幸にしてまで、私は幸せになんてなりたくない」

雨足は、梅雨時でも十分に強い。手一杯に握った豆を雨戸に投げたような音がぱらぱらと響いている。

「私は、家出します」

幸葉の意図がヤクにはまったくわからなかった。

「この雨のなか、傘もささずに何も持たないで、飛び出したら風邪は間違いなくひきますね。それに、ヤクのこと付きつきりで看病してるから、疲れてますし、私、運悪いですから、それよりも酷いことになるのは、明らかです」

「……気付いてたのか？」

「元から、巡り合わせが悪いって知ってましたよ。でも、それを嘆くよりはいつそ、笑い飛ばしてたほうが楽じゃないですか……。そうしなきゃ、生きて来られなかったんです。でも、この数カ月、本当に楽しかったですよ。でも、私のせいで、ヤクが苦しむなんて間違ってますから。ヤクも、きちんと家族に顔合わせて下さいね。あなたは、疫病神じゃないんです」

「ユキ、……ハ！」

「もう決めましたから」

水面にさざ波が立つように、ひっそりと言い残した。そんな言葉なのに、彼女の決心は波紋のように染みていった。

幸葉は、正座していたのにしっかりと足取りで立ち上がると、雨の中、外へ飛び出した。

立ち上がることも、大声をあげることも難しくなった厄病神。大馬鹿め、誰もいなくなった部屋でヤクは怨みがましく発することしかできなかった。

こっちだって、ユキ八が苦しむとこなんて見たくないのに。

無理矢理に、数日ぶりに布団から起き上がる。部屋中を確認すると、ヤクの探していたものはすぐに見つかった。

もう、数歩すら歩けないほどに衰弱している。それなのに、よろよろと、それでもそれに手をかけようと、歩き始め、到達する。

それに寄り掛かり、彼は、最期の力を振り絞る。

とことん、運の悪い奴。ヤクは熱に浮かされながらにやりとする。最後の最後で、疫病神に計画を潰されるなんてユキハは思いもしないはずだ。

彼女相手にかける厄が最初で最後だって、それすら皮肉となるのだから。

## 第八話

吐息は、魂を吐き出すように白く濁る。幸葉は、雨中、息が切れ切れになるまでに走った。

普段通る道をわざと避けて、がむしゃらに突き進んだから、自分がどこを走っているのかわからない。

けほつと、咳をした。少し、熱っぽかった。吸い込む息が、喉元をひゅうとならず。寒気が体を襲っているのに、気だるさは一向にやまない。

幸葉を打つ雨は、激しさを緩めない。雨水を吸い込み重みを増した衣服は、もはや意味をなさなかった。

ヤクの体調は、どうなったのでしょうか？　びちゃびちゃと水溜まりを撥ねながら、幸葉は思う。でも、そんなに簡単には治らないけど、快方へと向かうはず。彼女は、自ら、自分の意志で不幸に足を突っ込み、肩まで浸かろうとしているのだから。

そうしている内に、足が宙を泳いで、もつれた。地面に向かって身体を投げ出した。

俯せに丸まりながら、身体全体で酸素を求める。意に反して、身体が熱いのは、風邪が相当悪化したからだと感じた。

これで……。誰にも助けてもらえなかったら、いや助けてもらえない。ヤクは、苦しまなくてすむ。彼がたとえ厄病神で、自分に不幸をどんなに運んできたとしても、近くにいてくれるだけでほつとできたから。それに、彼が言うほどに不幸だっと思って思えたことなんてここ数日がない。ずっと昔のほうがいいやなことばかりだったのに。

湿ったアスファルトの匂いを嗅ぎ、幸葉は安堵する。気が抜けたのか、一気に眠気が襲って来た。彼女は、薄笑いを浮かべながら、誘惑に身を委ねた。

ばーか。と、ヤクの嘲りが聞こえた気がする。

## 第九話

幸葉が目を覚まして、最初に聞いた言葉が「あんた、馬鹿でしょ？」だった。

声が空から降ってくるようだ。そこで幸葉は布団に寝かされていたことに気づいた。おでこに寄せられた手ぬぐいがよく冷えていて気持ちがいい。先日まで、ヤクにしていた振る舞いとは真逆だった。でも、ヤクの声ではない。けれど、聞き慣れた声だ。正座を崩さずに、涼やかな視線で覗き込む彼女は幸葉がよく知る人だった。

「しいさん？」

バイト先の先輩だ。誰が聞いても間違はなく超一流と言ってしまふような私立大学に通う、面倒見のいいお姉さん。

でも、なんでここにいるのだろう？

「『しいさん？』じゃないよ……。ユキ、あんた何したかわかったんの？」

「私、生きてますか？」

「死にかけてた。あと、もう数10分、医者にかかるのが遅かったら、即入院だったんだって」

吐き捨てるように、天井を見上げる彼女だった。

「ここは何処ですか？」

「香田幸葉さんの家」

「私の家？」

「鍵開けっ放しで出ていくなんて不用心甚だしい」

「でも、なんでしいさんが？」

きょとんと、まるで何も分かっていないかのように問う後輩の態度にしいさんは見えない程度に眉をひそめる。

「あんたが電話かけてきたんでしょうが。誰だって、電話であんな死にそうな声で、『助けて』なんて言われたら、助けに行く」

「電話。ですか？」



あの日、幸葉は電話などしなかったはず。ずっと雨の中を走っていたのだから。

「ちようど近くにいたからさ、家までよってこうしたら、あんたが道端で倒れてんの」しいさんは、足をくずした。「もう少し、辛抱しようよ。それが、せめて傘くらい持つてくとか。自殺行為だし」「すいません」

どちらかというと、そうなる事を望んでいた。そうなれば、厄病神であるヤクの調子が良くなるはずだったのだから。

「最低でも、三日は寝ておくことだって。お医者 of 診断だけど。あと一日と半分だけどさ」

「一日？」幸葉は違和感を覚えた。「今日は？」

「丸一日寝込んでたから、九日」

「平日じゃないですか？　しいさん。大学は？」

「私は、人脈広いから。授業は友達にとってもらってる。出席とる授業は、教授に理由話して、どうにかしてもらってる。頭が固い人達ではない。それに、授業料よりも命のほう that 価値はずっとある」事もなげにぶちまけるしいさんだった。だけど、思い返してみたら彼女はそんなこと日常茶飯事に行っている。

「じゃあ、今までずっと看病してもらったわけですか？　私は？」

「気にしない。後で、対価はもらうから」

「すいません」

「困った時は、お互い様」しいさんは、窓へと視線を向けた。「私も昔そうだったし」

「でも、お礼したいです」

無理やりにも、体を起こそうとした幸葉の肩をしいさんは押さえた。

「そついう、健気なところ、私好きなんだ。どつかの馬鹿とは大違いだ」

「で、どうなりますか？」

「お礼なんて簡単。あんたの大学の野球部の合宿所におにぎりの差

し入れをもっていく。それか、現地で作るか。場所はここから三駅くらいだし、私もついていくから」

「野球部？」

「私、双子でさ。弟が野球部なんだよね」

「そうなんですか？」

「そう。そいつのツテで、医者も探してもらったし、家から着替えと勉強道具持って来させたから……」。

ああ、あいつ。幸葉の住所知ったけど、ストーカー紛いの事はないし、したら私が許さないから気にしないで。彼女がいる分際でそんなのしたらとつちめるだけだよさ」

「おにぎりは得意料理です」

ヤク相手に、毎日作っていたから。彼の好みに合うようにずっと作っていたから、失敗することもないはずだ。

「それはよかった。詳しいことが分かったら、連絡する」

「お願いします。いろいろしてもらって、助かります」

「私も困った時は頼るから。そのときは、ユキに頼むことにする」

「はい。でも、話したら、少し楽になった気がします。ありがとうございます」

「それは、それは」

.....

「そういえば、私の鞆に小鬼にストラップ、ついていませんか？」

「どの鞆？」

「いつも、持っていく鞆なんですけど」「机の上に置いてあるやつ」  
首を縦に振る幸葉。しいさんは、立ち上がり、すぐに鞆を見やっ  
た。

「見えないね」

「それじゃあ、テーブルの上は？」

「それもない」

「部屋の中ですか？」

「あまり、かき回したくはないけどそれらしいものは一度も見えてない」

「そうですか……」

幸葉は肩をおとす。かけられている布団が重くなったような気がした。

「それが、どうか？」

「いや、何でもないです」これ以上、先輩に迷惑はかけたくはなかった。それに、喋るストラップの話をして、彼女がどのような反応を示すかが怖かった。ふざけて言っているようにしか聞こえないはずだから。普通、そんなものは存在しないはずだから。

「それよりも、眠くなくなっちゃいました。しいさん、何か面白い話ありますか？」

いぶかしむしいさんの注意をそらそうと、違う話を振ることにした。

「面白い話って言ったら、もっぱら弟の話になるけど、それでよければ」

「しいさんの話、いつも面白いから楽しみです」

バイト先で話してくれる彼女の話はいつもそうだ。けれど、それでも無理に笑おうとした。笑わなければいけなかった。

あの厄病神の事。最後の最後で彼女を不幸な目にあわせた彼の事を今ここで思い出さないためにも。

「あれは、高校の時だった……」

そんな、幸葉の事を尻目にしいさんはいつものように、昔の話を語り始めた。

## 第十話

くそ兄貴と、聞こえるように吐き捨てたのに、あいつは聞こえていないかのように、こちらを向き笑顔を見せた。

「愛する弟よお！」

「気持ち悪い。何が『愛する』、だよ。そんなもん使うなよ」

「だって、だって、だって。久しぶりの再会じゃないか！ 父様や母様ではなく、僕に会いたいだなんて……。兄ちゃん感動だよ」

ただ、連絡しやすかったただけなのだ。だが、一段と大袈裟な性格が派手になっている。そこまでは予期できなかった。失敗したかもとヤクは後悔した。どうも、彼女の不幸を背負ってきてしまったようだ。

でも、それはそれでヤクにとってはよかったのだけれど。

ユキハとの縁をあれ限りで切った厄病神の体調は本調子とは言わないまでも、動ける程度までは回復していた。

だから、こうやって長い間連絡をとっていなかった家族の一人とも連絡が取れるのだ。

「そりゃ、よかった」

「僕も弟が一步も二歩も三歩も成長してるのが、とても嬉しいよ」

「俺は、一体何歩成長してるんだ？」

「六歩だよ。とりあえず、福の神になりつつあるんだ。弟よ」

「いまいち実感がないんだけど」

「そりゃそうだ。自分自身で分からないから成長してるんだ」

「なんだよ、それ？」

本当に、兄貴はまわりくどい。必ず、わけがわからなくなる。

「君は、人が幸せになるってどんな感じかわかるかな？」

兄の質問に、弟は首をひねる。「わからない」

「あの女の子はどんな感じだった？」

「笑ってた。どんな時でも……俺が厄病神だつて言っても。俺が

いるからあいつはよかったなんて言ってる」

「それだよ」「はっ？」

いまいち、兄の言っている意味がわからない。さっきよりも、手を伸ばしても届かない位置に遠のいた気がした。

「まあいいや。誰だって、最初は失敗ばかりだし、後から気付いていくものさ。だから、そんなに気に病むことはないんだよ。弟よ」

「だから、何回も聞いたって」

「今、一番耳、傾けてるだろう？」

「それはそうだけどよ」

「よし。じゃあ、これからやることは分かっているだろう？ 弟よ」

「ちよつ。なんだよ、その急な展開。全然わからねえ！」

「善は急げだよ」

「だからなんなんだよ」

「君は大事なことを忘れてる」「早く教えるよ」

「担当していた女の子は、どうするんだい？」

「俺が一人前になるまで、姿を現さない。俺はまだ中途半端だし。

一人前になったら、真っ先にあいつに会いに行く。かんぺき幸せになつてもらいたいんだよ」

「いい心掛けだ、兄ちゃん感動した！……なんて言うと思っているのかな、このうすらとんかち」

兄は指先で弟の額をはじいた。

「痛っ」「あの女の子を不幸にしたままで、僕が許すと思っているのかい？」

兄の仕打ちがそんなに深刻だったのか、弟はまだ額を抑えていた。「もう少し、考えてみるんだ」

痛みをこらえていた弟の身体がふわりと宙に浮かぶ。どうしたのかと、顔を覆っていた手を外した彼は、いたづらっぽくほほ笑む兄と眼が合い。

そのまま、落下していく。

「何するっ？」「もうちよつと勉強してきなよ」

だから何を？ そんな声が小さくなっていき、ようやく兄はひとりごちた。

「獅子は子供を谷底に突き落していくんだ」

何か場違いだと、そう思うのは気のせいだろうか？

「誰かを喜ばせる代わりに誰かを悲しみに突き落すなんて半人前なんだよ、弟」

.....

今日は休みの日。しいさんとの約束を果たす日だった。

いつもより早めに目が覚めた幸葉は、玄関の郵便受けを確認する。別に、新聞を毎日取っているわけではないけど、たまにはがきが入っていることがある。できるだけ、そこはすっきりさせたかった。

もしかしたら……。そんな期待もかすかに持たせながら。彼とは、あの雨の日以来一度も会ったことがなかった。どこかにいつてしまったと、頭の中ではそう結論づけていても、片隅にそんな期待を寄せていたのも事実だった。

ふたに手をやると、中で物音がした。頭のぶつけたような、そんな音。

あけると、見覚えのあるような後姿が目に入った。

青が抜け始め、黄色に染まり始めたその姿。前よりも、角が丸みを帯びていた。でも、見間違うはずがないその身体。

彼の名を呼ぶと、照れたように振り向いた。目のやり場に困っているかのように、視線をさまよわせていた。

そんな彼におかまいなく、幸葉は初めて出会うかのようにそれをつかみ、両手で握りしめた。

おかえりなさい、と。

## 第十話（後書き）

ひとまず、これで終わりです。ここまでお読みいただき、感謝します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8600e/>

---

疫病神の君

2010年10月8日15時52分発行